

# 教職課程を履修する学生の資質能力を育成するための教育について

木村 勝美\*

## Necessary Education Measures to Develop the Qualities and the Abilities of Undergraduates Who Are in Teacher Training Courses

by

Katsumi KIMURA\*

### 要 旨

本稿では、教職課程を履修する学生に対して、専門職としての知識・技能や総合的な人間力等の教員として必要な資質能力を教職科目においてどう育成しているかについてまとめてみた。特に、生徒（中学校・高等学校）の学力を向上させるための実践的指導力及び教育現場等から強く求められている社会性・コミュニケーション力等の育成を中心に具体的な取組を示した。

**Key Words:** 学力の3要素、実践的指導力、総合的な人間力

#### 1. はじめに

本学では、教育職員免許の取得を希望する学生に対し、教職科目等の授業を通して、教員として必要な資質能力の育成を図っているところである。中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（平成24年8月28日）では、これからの教員に求められる資質能力として、

- (1) 教職に対する責任感、探求力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力
- (2) 専門職としての高度な知識・技能
  - ・教科や教職に関する高度な専門的知識
  - ・新たな学びを展開できる実践的指導力（基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探求

型の学習、協働的な学びなどをデザインできる指導力)

- ・教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力

- (3) 総合的な人間力（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力)

が明記されている。

また、教育現場が求める教員としての資質能力については、毎年2回開催されている「熊本市立中学校・熊本地区大学教育実習連絡協議会」の中で、県内・県外関係大学に対して指摘・要望される事項（教育実習生としての姿勢、教科指導、生徒理解等）からも明確に把握できる。

**【教育実習連絡協議会での関係大学への主な指摘・要望事項】**

\*崇城大学工学部総合教育准教授

- (1) 教育実習生としての姿勢について
- ・社会人としてのマナーを十分身に付けさせてほしい（挨拶や言葉遣い、時間厳守、服装、髪型等）。
  - ・学ばせて頂くという感謝の気持ちや謙虚な姿勢を育成してほしい。
  - ・何事にも積極的に取り組んでほしい。等
- (2) 教科指導について
- ・専門教科に関しての知識・技能を十分身に付けさせてほしい。
  - ・学習指導案の作成や授業計画については、ある程度大学で事前に指導してほしい。
  - ・板書や発問についての基本的部分は事前指導が必要である。等
- (3) 生徒理解について
- ・生徒とのコミュニケーションをもっと積極的に取ってほしい。
  - ・生徒に対しては、教師としての対応が必要である。
  - ・授業だけでなく、掃除指導・給食指導等にも積極的に取り組んでほしい。等

「中央教育審議会答申」及び「教育現場からの要望等」を踏まえ、担当する教職科目（教職概論、教育方法論、事前・事後指導等）において、学生に教員として必要な基本的な資質能力の育成を図ってきた。

担当する教職科目内容が、上記の教員に求められる資質能力すべてを網羅してはいないので、担当科目と関連ある「専門職としての高度な知識・技能」に関する『新たな学びを展開できる実践的指導力』及び『教科指導を的確に実践できる力』、「総合的な人間力」に関する『社会性、コミュニケーション力、チームで対応する力』、並びに「教育現場が求める資質能力」をどのように育成しているか、その取組の一端を述べていきたい。

## 2. 教科に係る実践的指導力の育成

中学校・高等学校（本学の教育職員免許状対象校種）における教科（科目）指導の主たる目的は、生徒一人一人に学力を確実に定着させる

ことにある。これからの生徒に培うべき学力に関しては、学校教育法第30条第2項（小学校）「第49条—中学校準用規定、第62条—高等学校準用規定」において、次のように述べられている。【前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。】

つまり、これから学校教育で育成すべき学力の重要な要素は、

- ①基礎的・基本的な知識・技能
  - ②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
  - ③主体的に学習に取り組む態度
- であり、この学力の3つの重要な要素を生徒に育成するための指導方法を下記の（1）（2）（3）の通り学生に指導してきたところである。『③は省略』

### (1) 基礎的・基本的な知識・技能定着のための指導について

国際化、情報化、急速な科学の進展等変化の激しい21世紀を生き抜いていかなければならない生徒たちには、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力が必要であるが、この基盤となるのは、基礎的・基本的な知識・技能である。

中・高校生に基礎的・基本的な知識・技能を習得させるために必要な教科に関する専門的知識については、専門科目の授業で教授されているので、ここでは、知識・技能を習得させるための指導方法について述べていく。

イギリスの哲学者ホワイト・ヘッドの言葉「あまりに多くのことを教えることなかれ、しかし、教えるべきことは徹底的に教えるべし」を踏まえ、「学習指導要領及び教科書の読み込み」、「基礎的・基本的な知識・技能の洗い出し（精選）」、「系統的な整理」、「授業における学習内容の徹底指導」、「未定着学習内容の反復学習・補充指導等」という〔表1〕の【徹底指導

の過程】を提示し、基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させるための指導方法の理解を図ってきた。

表1 【基礎的・基本的な知識・技能定着のための徹底指導の過程】

1	基礎的・基本的な知識・技能の精選
	① 学習指導要領及び教科書の読み込み
	② 教科(科目)の基礎的・基本的な知識・技能の洗い出し(精選)
	③ 学年全体を見通しての体系化(系統的な整理)
↓	
2	基礎的・基本的な知識・技能の年間指導計画への位置づけ
↓	
3	各授業における学習内容の徹底指導
↓	
4	未定着学習内容の徹底指導による定着 「繰り返し学習、補充指導、個別指導等」
↓	
5	家庭学習との連携

(2) 思考力・判断力・表現力等の育成を図る指導について

① 学力(思考力・判断力・表現力等)の状況

2003年及び2006年に高校1年生を対象に実施された「PISA(OECD生徒の学習到達度調査)」[表2]の結果によると、2000年に比較すると全体的に学力が低下傾向にあるとともに、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題に課題があることが判明した。そこで、今回の学習指導要領(中学校学習指導要領2008年改訂—2012年から完全実施、高等学校学習指導要領2009年改訂—2013年から学年進行で実施)においては、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力等の育成が重視されているところである。

(2009年、2012年 PISA 結果では日本の生徒の学力は向上)

表2 【PISA(OECD生徒の学習到達度調査)】

① 調査目的	知識や技能を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価する。		
② 調査対象	義務教育修了段階の15歳児「高校1年生」(抽出)		
③ 調査分野	・「科学的リテラシー」 ・「読解力」 ・「数学的リテラシー」		
	2000年	2003年	2006年
科学的リテラシー	2位 (2位)	2位 (2位)	3位 (6位)
読解力	8位 (8位)	12位 (14位)	12位 (15位)
数学的リテラシー	1位 (1位)	4位 (6位)	6位 (10位)
☆上部は OECD 加盟国での順位 ★下部の( )内は OECD 加盟国及び非加盟国等での順位 『2000年』: OECD 加盟国 (28) 加盟国+非加盟国等 (32) 『2003年』: OECD 加盟国 (30) 加盟国+非加盟国等 (41) 『2006年』: OECD 加盟国 (30) 加盟国+非加盟国等 (57)			

② 思考力・判断力・表現力等を育成する能動型学習の指導

日本の生徒の課題となっている思考力・判断力・表現力等の育成を図るため、生徒が主体的に問題解決等に取り組む学習、能動型学習についての指導を行ってきた。

能動型学習のあり方として、次の3点に配慮させている。

- (ア) 生徒が主体的に学習に取り組む時間や場の設定
- (イ) 思考力・判断力・表現力等を培う教材の作成
- (ウ) 生徒が主体となる学習形態の工夫(体験的な学習、問題解決的な学習等)

また、[表3]の【思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習活動例】を提示し、具体的な学習のあり方についての理解を深めてきたところである。

表3 【思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習活動の例】

①	体験から感じ取ったことを <u>表現</u> する。
②	事実を正確に <u>理解</u> し <u>伝達</u> する。
③	概念・法則・意図などを <u>解釈</u> し、 <u>説明</u> したり活用したりする。
④	情報を <u>分析</u> ・ <u>評価</u> し、 <u>論述</u> する。
⑤	課題について、 <u>構想</u> を立て実践し、 <u>評価</u> ・改善する。
⑥	互いの考えを <u>伝え合い</u> 、自らの考えや集団の考えを発展させる。

③思考力・判断力・表現力等の育成を図る言語活動の工夫

今回の学習指導要領の改訂において、教育内容に関する主な改善事項の1つに「言語活動の充実」が掲げられ、学習指導要領解説（総則編）には【知識・技能を習得するのも、これらを活用して課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われるものであり、これらの学習活動の基盤となるものは、言語に関する能力である。】と述べられ、思考力・判断力・表現力等の育成を図るために、各教科等において言語活動を充実することが求められている。

〔表3〕の【思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習活動例】の下線部分はまさに言語活動そのものである。

そこで、下記の【ア 言語活動の充実を図るキーワード】—『対話』、『討論』、『議論』等を提示し、そのキーワードを考慮した学習活動を展開することによって思考力・判断力・表現力等の育成を図る授業の工夫改善を行うよう指導している。

また、【イ 言語活動を工夫した授業場面】を示し、教師主導の授業に『班別討議』や『生徒が説明する場面』等の生徒が主体的に活動する学習場面を加味した工夫を、模擬授業等で実施するよう指導を行っている。

さらに、【ウ 単元における言語活動の展開例】を示し、予測（予想）・記録・討議・報告書の作成等の言語活動を取り入れた学習指導案

の作成に取り組ませている。

ア 言語活動の充実を図るキーワード

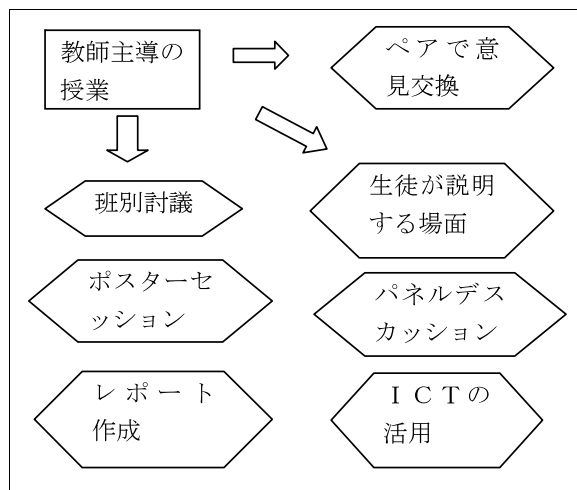
《キーワード》

- 解釈、要約、説明
- 予測、比較、分析、検討
- 記録、報告      ○批評、論述
- 対話、討論、議論等

↓

【学習活動の工夫】

イ 言語活動を工夫した授業場面



ウ 単元における言語活動の展開例

1 単元名 基礎的な生産技術（工業技術基礎）		
2 言語活動の概要例 (1) 実験結果の <u>予測（予想）</u> (2) 実験内容の <u>記録</u> (3) 実験結果についての <u>討議</u> (4) 実験についての <u>報告書の作成</u> ★太文字部分は言語活動		
3 言語活動を工夫した単元の展開例		
	学習活動（概略）	言語活動
第1次（1時間）	①実験についての説明 ②実験結果の予測	実験後にどのような結果が得られるか自分の <u>考えをまとめ、グループで意見交換をする。</u>
第2次（5時間）	③機械加工・加工準備・取り付け・加工条件の設定等	・役割を分担し実験内容の <u>要点について記録にまとめる。</u> （表・グラフ） ・実験結果から、 <u>予測したこととの比較・検討を行う。</u>

第3次 (3時間)	④本時の実験 のまとめ (報告書の 作成)	・実験内容、結果、考察等 について、 <b>要点をまとめる。</b> (ICT・図書館利用)
--------------	--------------------------------	--

(3) 実践的指導力の育成について

教科(科目)に関する専門的知識や指導法をどれだけ多く身に付けていたとしても、実際の授業の中で、生徒に基礎的・基本的な知識・技能等の学力を確実に定着させることができなければ教師としての責務を果たしたとはいえない。そこで、下記に示す通り、①学習指導案の作成—②教材の開発—③模擬授業—④授業研究の順序で段階を踏み、学生に教科指導に係る実践的指導力の育成を図ってきた。

①学習指導案の作成

学習指導案は授業者が授業を進めるに当たっての実践的なマニュアルであり、授業の目標や指導過程等を記した学習指導のプランである。教育実習校からも、少なくとも学習指導案は作成できるよう大学で指導してほしいとの要望がある。

そこで、[表4]の【学習指導案の基本的形式】を提示し、それをもとに学生個々の工夫を活かした学習指導案を作成させてきた。

表4 【学習指導案の基本的形式】

第〇学年〇組 〇〇科学習指導案				
日時				
場所				
指導者(実習生)氏名 印				
1 単元(題材)名				
2 単元(題材)について「単元設定の理由」				
(1)単元(題材)観 (2)系統観				
(3)生徒観 (4)指導観				
3 単元(題材)の目標				
4 単元(題材)の評価規準				
5 指導計画及び評価規準(基準)				
6 本時の学習				
(1)本時の目標				
(2)本時の展開				
過程	学習活動	(指導形態)	指導上の留意点・評価等	備考
導入				
展開				
整理				

学習指導案作成時に、特に学生が困難を感じる、[表4]の『2 単元設定の理由(単元観・系統観・生徒観・指導観)』、『5 指導計画及び評価規準(基準)』及び『6(2)本時の展開』については、下記のように具体的視点や形式を示し、より理解を深め作成させている。《具体的視点及び形式》

2 単元について(単元設定の理由)

(1) 単元観

- ・本単元のねらいや本質、教育的価値を本単元内容と学習指導要領の目標や内容との関連、本単元の必要性和今日的意義等の視点からまとめる。
- ・本単元に対する指導者の考え方を明示する。等

(2) 系統観

- ・本単元と事前・事後の学習の適切な連続性・継続性のために、小・中・高等学校の学習指導要領(解説)により本単元の系統性を把握し、文章又は図式で明確化する。  
(例)『小(学習内容)→中(学習内容)→高(学習内容)』

(3) 生徒観

- ・本単元に関する生徒の興味・関心、学習の定着状況、学習活動の雰囲気、学習活動の経験等を記述する。その際、「事前アンケート等の状況」、「既習事項の定着状況」、「学習への姿勢・発表(観察)」等に基づき記述する。

(4) 指導観

- ・単元観、系統観、生徒観を踏まえ、本単元の目標を達成するための指導方法や学習活動の工夫(学習形態・発問・板書・教育機器等)、指導上特に注意すべきこと、評価の進め方等について記述する。

5 指導計画及び評価規準(基準)

- ・単元全体を通しての各時間の学習活動の位置づけを明確にする。
- ・「単元の評価規準」を指導計画の中に具現化して位置づける。
- ・各時間の学習活動において重点を置く評価の観点・規準(基準)・方法を記述する。

\* 『指導計画及び評価規準(基準)』の作成形式

例』

次	時	学習活動	評価項目				評価規準 (基準)・方法
			関	思	技	知	
1	1		○				
2	3			○		○	

6 (2) 本時の展開

○学習活動

- ・導入段階では本時の目標や課題を明示する。
- ・本時の目標達成に向けた効果的な学習過程や学習活動を工夫し記述する。(課題把握—課題解決への取組—考察—まとめ・整理等)
- ・生徒の立場で、「～することができる。」等の表記にする。等

○指導上の留意点・評価等

- ・学習活動に対応して特に配慮すべき指導のポイントを記述する。(資料や教材の効果的活用、実験・観察の手立て、主体的学習活動の工夫等)
- ・本時の学習活動に関する評価規準(基準)・評価方法を具体的に記述する。
- ・教師の立場で、「～させる。」等の表記にする。等

②教材の開発

教科指導に当たって、主たる教材は教科書であるが、生徒の学習への興味・関心を高めたり、授業内容の理解をより深めたりするには、実物教材を活用したり、教師自身が教材を開発・工夫(教具、資料、学習シート等)することが重要である。そこで、模擬授業に当たっては、時間等も配慮しながら [図1]、[図2] のように可能な限り学生に自作教材を作成させ、模擬授業を行わせた。



図1 【学生作成の模擬授業用美術教材】



図2 【図1の教材を使つての模擬授業】

③模擬授業

教職課程を履修している学生に、①で作成した学習指導案に沿って、他の学生を生徒(中学校・高等学校)と想定し、発問、板書、教材の活用等を工夫させながら、[図3] のように学生一人一人に模擬授業を行わせてきた。人数が多いため、それぞれに十分な時間が確保できないのが課題である。



図3 【学生によるパワーポイントを使用したの理科の模擬授業】

④授業研究

模擬授業後、授業中に[表5]の【授業評価表】をもとに評価された事項(指導過程・教材の工夫等)について、他の学生及び教員から感想・意見をもらい個々の授業の改善を図らせてきた。

表5 【授業評価表】

	評価の視点	評価 (A・B・C)
評価項目	指導過程の工夫	
	教材の工夫	
	発問の工夫	
	板書の工夫	
	生徒の把握	
	態度・声量	
総合評価		
感想・意見		

3. 総合的な人間力育成のための取組

総合的な人間力を含め、教員に求められる資質能力については、授業において、これまでの「中央教育審議会答申」や「くまもとの教職員像」等を提示し、その概念についての理解を深めてきたところである。

総合的な人間力の具体的な育成については、教育現場等の要望等も勘案し、担当する教職科目において、社会性やコミュニケーション力、チームで対応する力を育成している。

(1) 授業中における取組

社会性やコミュニケーション力の育成のためには、日常の取組が必要と考え、授業において、まず、礼儀の基本である挨拶を身に付けさせるため、挨拶の意義を理解させるとともに、授業の始めに大きな声で挨拶を行うよう指導している。

また、学生のコミュニケーション力を培うため、発問一応答の場面を可能な限り設定し、教師の発問に対し、口頭や板書発表で応答する機会を多くしている。このような取組により、自

主的に発表する学生も出てきている。さらに、社会で必要となるチーム力を育てるため、「教員に必要な資質能力とは何か。」等の課題を設定し、班別に協議させたり、模擬授業の実施に当たっては、[表6]の方法により、班全員による学習指導案の作成・模擬授業の練習、各班員分担による教材作成・板書計画・学習シート作成など班単位で協力して模擬授業(教科・HR活動)を構築・実施させる機会等も設けている。

表6 【グループによる模擬授業への取組】

1	学習指導案原案の検討(班全員)
↓	
2	模擬授業へ向けての準備(各班員)
	① 学習指導案作成(全員)
	② 教材作成担当
	③ 発問の工夫担当
	④ 板書計画担当
	⑤ 学習シート作成担当
	⑥ 模擬授業担当
↓	
3	模擬授業の練習(班全員)
↓	
4	模擬授業(班代表者)
↓	
5	評価・反省

(2) 教育実習に向けての教師としての心構えの指導

教育実習を迎える3年生に対しては、学校という社会体験の場の厳しさや社会人としての意識を実感させるために、教育実習を終えた先輩から以下の点について講話をしてもらっている。

- ①勤務時間等の厳守(勤務開始終了時間の厳守、遅刻・早退・欠勤の連絡、10分前行動等)
- ②適切な挨拶等の礼儀
- ③社会人らしい服装・髪型等
- ④携帯電話等の所持品への配慮
- ⑤生徒との触れ合いの大切さ等

その後、講話内容を参考に、各自教育実習にどう向き合っていくかを討論させ、教育実習へ向けての心構えを明確にさせてきた。

また、これまでの教育現場等の意見や実情を

踏まえ、下記事項の徹底も図ってきたところである。

- ①教育実習生は、実習生であるとともに、教師であり、その言動が生徒へ大きな影響を与えることを自覚すること。
- ②教育実習生受入校（管理職・担当教諭等）への感謝の気持ちを忘れないこと。
- ③先輩教師から教えて頂くという謙虚な気持ちを持つこと。
- ④常に報告・連絡・相談を行うこと。
- ⑤実習生が持つ、若さ、元気さ、明るさを出すこと。それが生徒を惹きつけるし、学校に活性化を与えること。
- ⑥教育実習後はお世話になった方々にお礼状を出すこと。

#### 4. 成果と課題

3～4年前までは、教育実習校から学生に社会人として必要な礼儀や服装等が身に付いていないなどと、かなりの厳しい指摘を受けていたが、近年、社会人としてのマナーについての指摘は少なくなってきた。本学の先生や各県事務所所長（熊本県以外）の方々に教育実習校を訪問（授業参観等）して頂いているが、実習生が早朝から出勤し、挨拶運動や職員室の清掃等に取り組んでいたとの報告や、教育実習中の本学の学生の真摯な態度と姿勢が他大学の教育実習生によい影響を与えたとの報告もあった。高校時代とは比較にならないほど熱意・積極性があり、崇城大に進学して成長したとの高校からのありがたい評価も聞かれた。

しかし、教育職員免許状を取るだけとの意識から積極的に教育実習に取り組む姿勢が不足している学生がいるとの指摘もある。

授業に関しては、教育実習校の先生方の指導もあり、ほとんどの学生が適切な授業を行ったと聞いている。学生が作成した教材が現場の先生から高く評価されたり、教育実習校からの評価が満点の学生がいたり、教育実習校の校長から素晴らしい教員になるとの評価を受けた学生もいた。しかし、課題も少なからず見られ、生

徒に聞こえない声量での授業や黒板中心の教師主導型授業、事前準備不足の授業もあった。問題点を踏まえ、今後、指導の改善を図っていきたい。

特に理科では薬品等の危険物に十分配慮した授業を行うよう指導の徹底が必要と感じている。

「聞いたものは忘れ、見たものは覚え、体験したものは身に付く」と言われるが、教育実習を終えた学生は、学校現場体験を通して、職業の厳しさ、社会人としての礼儀、服装、言葉遣い等の大切さを体験し、人間的に大きく成長してくる。教職の素晴らしさを実感し、教職への意志をより堅固にする学生もいる。1、2年生の早い段階で学校現場体験の機会を設定することの必要性を痛感するところである。

#### 5. おわりに

今回教育実践をまとめるに当たって、自己の教育実践を見つめ直すとともに、今後改善していかなければならない課題にも気づかされたことはとても有意義なことであった。

課題としては、専門科目担当教員と教職科目担当教員との連携・協力体制の構築である。専門科目に関する知識・技能と教科指導方法が組み合わされ、真の実践的指導力が培われていくからである。

また、大学の授業での指導がかなり困難な「教育者としての使命感や責任感、教育的愛情」の育成がもう一つの課題である。これらの資質育成のためには、学生と中・高の生徒とが直接触れ合う学校現場体験が有効で、地元教育委員会や中学校・高等学校との連携・協働関係を構築する必要がある。

今後、教職課程関係の先生方の協力も得ながら、このような課題解決に向けて微力ながら努力していきたいと考えている。

#### 参考文献

- 1) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成20年1月17日）



- 2) 中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(平成24年8月28日)
- 3) 中学校学習指導要領
- 4) 高等学校学習指導要領
- 5) 中学校学習指導要領解説(総則編)
- 6) 高等学校学習指導要領解説(総則編)
- 7) 言語活動の充実に関する指導事例集(高校版)「文部科学省」

